

編集後記

編集長(ダン シロウ)

マガジンのことをご存知ない方にお教えすると、しばらくして、「見ました。驚きました！」という声が届く。執筆者の皆さんはご承知のことと思うが、本誌の世間周知度は決して高いとは言えない。(だから、貴方のお知り合いに告知を)

原稿の長短は様々とはいえ、基本的に長い文章が多いこのマガジンは、SNSのように短く分かりやすい言葉ばかり求める時代の風潮とは、存在を異にしている。

だから何かの機会に読者自らが見つけて下さるのが、最良の遭遇だと考えている。慎重にご案内はするが、大々的告知活動と読者の拡大は、本誌の姿勢とそぐわない。出会いにも、それぞれ、時があるのだ。

自分の知らないところで、こんな着実な営みが10年に達しようとしていて、訪れてみたら、バックナンバーに欲しい記述が分厚く存在している。訪問者にとっては、近接領域に働く者同士が作り上げた智の花園である。そこに入るのに、資格も支払いも不要という、公共財としての対人援助学的知見群。

こういうものの編集長として、ここまで継続してこられたの幸運で、人生の大きな喜びである。

*

今年度、第24回「平和・協同ジャーナリスト基金賞」の「荒井なみ子賞」を執筆者の水野スウさんが、受賞されました。

「わたしとあなたのけんぼうBook」と「たいわけんぼうBook+」、他様々な活動に対するものです。本誌に連載されている文章も含まれています。スウさん、おめでとございます。詳しくはご本人の執筆者短信をどうぞ。

*

10年も続けていると、いくら長期連載といっても、終了回もやってくる。永遠の連載もいつにかまわれないが、命に寿命があるごとく、終わる連載もある。名残惜しい気もするし、又新たな装いでもと思うが、それは執筆者のお決めになることだ。

編集長としては、しばらくして、「又書いてみようか！」と思われたとき、変わらず同じ場所に存在する場でありたいものだ。

編集員(チバ アキオ)

喪主挨拶という経験は非常に困りました。亡き父を知るたくさ

んの人の前で、息子が話すのです。そこには息子が知らない父の姿を知っている人もいるでしょう。息子が生まれる以前の父を知っている人もいるでしょう。父のせいで悔しい思いをした人もいるでしょう。しゃあない奴だと思っていた人もいるでしょう。お世話になったと思ってくれた人もいるでしょうし、かわいがってくださった方もいるでしょう…。一人の人生というのは切り取り方によって、本当にどうにでもなります。「あの人の息子は喪主であんなことを言っていた」そう思われることが私は嫌でした。また同時に、参列してくださった方に、息子の涙や、別れを惜しむ思いを素直に語ることが「いい式だった」ということになるかもしれないとも思いました。…しかし、それはできませんでした。そして、よくある喪主挨拶の定型文にしました。その方が、参列してくださった方、個々の故人への解釈を維持できるのではないかと考えました。必ずいろんなことを思っている人がいるだろうとを感じる人でした。それだけ、筋が通らないこと、誰かが何かに蹂躪していることは、ほっておけない人でした。名前の通り「正義」な心がありました。それには当然対峙した方がいるのです。その人から見た父の姿や、父の人生もあるでしょう。それでいいんです。人生のどこをどうつなげて編集するのか。それは残されたもの、それぞれです。それを維持することがいいなあと思いました。こうしてしばらく時間がたつと、今頃になって、もう少しアレンジがあった方がよかったかな…と思わなくもないですが、その時の私の選択はそれでした。人生であっても、事象であっても、物事は決定的ではなく、よいところも、そうでないところもありながら進む。万事それにつき、人は受け取りたいように受け取る。それは受け取る側の力ではないかと団編集長に若いころに教えてもらった言葉がよぎるので。だから故に、何かに、誰かに認めてもらうためではなく、自分が好きなように生きるということが人生を歩む姿勢になる。「あの人はこんな人だった」。誰もがその日が来れば他者に編集されるわけです。うん、そう思うとマガジンは、いい媒体です。さあ、また私の時間を進めていきます。父よ、ありがとう。

編集員(オオタニ タカシ)

12月のマガジン編集会議は、年末が訪れたことを実感する一つの機会になっている。大人になると、1年はあっという間に感じられ、瞬間に5年、10年が過ぎ去っているという感覚をもつ人も少なくないだろう。マガジンも気がつけば35号、いよいよ9年目を終えようとしている。創刊号では79ページであったものが、いまは300ページ超、それが35冊。一から読めるボリュームではないが、これこそ編集長が意図していた「時代の資料になる」ということなのだろうと思う。これだけのボリュームの

ものが、クリック一つで次々見られるように Web 公開されていることの価値を、改めて実感する。

最近、所属している他の学会でも、学会誌の Web 公開に踏み切るところが増えてきている。得られた知見や研究実績を、内輪にしか見えないようにしておくよりも、広く知ってもらう方に意味があると気づき始めたのかもしれない(印刷費の問題で Web 版に追い込まれた感じの学会もあるけれど…)。

マガジンが掲載されている対人援助学会のホームページも、先日リニューアルされました。このようなメンテナンスを行ってくださる方がいることで、「マガジン」は機能しています。いつもありがとうございます。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻35号

第9巻 第三号

2018年12月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第36号は2019年03月15日
発刊の予定です。

原稿締切2019年02月25日!

常に新規執筆者を求めていますし、お誘いすることもありますが、執筆依頼はしていません。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の専門分野の今の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌ですが必ず何回以上と決めているわけではありません。必要な回数(ずっと・・・というのもあります。)を、書いていただけるよう設定します。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。したがって非会員で書いていただく事になった方には、対人援助学会への入会をお願いします。まだ登場していない分野、様々な立場の方達の対人援助領域からの積極的発信を期待します。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

夫からの暴力被害を、ファンデーションで誤魔化したり、マスク、サングラスでカムフラージュしている母親に会ったことがある。

どうして我慢を?と思ったが、子ども達への配慮や自分の人生の総合的判断として、その方が得だと結論づけていた。当然、思い切って決断した人にも会ったが、たしかにその酷い道以外は皆良い道だなどと安易には言えなかった。

人の暮らしは一色では描ききれない。どんなダークカラーを引き受けて配合するかは、個性の高い、人の暗部の問題だ。

しかし、そんな暗部が一部の人の背負わされて、社会が構成されている結果を見ることも少なくない。個人の中の暗部・・・と前提しているのに、社会の暗部の偏在がどんどん加速する。

そして突然、初めて気づいたかのように特定の被害がクローズアップされ、世間の関心を呼ぶ。そしてその後に来るのがお決まりの反動だ。それはたいてい自己責任論で、いつも世の中の同じ一群がそう語る。

普通に暮らす市民の身上に起きた不幸を、世界は簡単に忘れてしまう。明日は我が身であることも、自分に起きるまで気づこうとしない。

認識する、記憶する、記録する、これは私達の世界の理解方法なのだ。

(2018/12/10)